

子どもの「育てにくさ」と育児不安・マルトリートメント(2)

— 4歳児と6歳児を中心に —

山本理絵 神田直子

I. これまでの研究の経緯と本研究の目的

近年、親の育児不安が高まってきており、子育て支援事業が各地で行われるようになってきているが、支援する必要があるが自分から支援機関に足を運べないような親をどのように支援していくかが課題とされている。そこで、筆者らは、子育てに特に困難を抱え子育て支援を必要とする層の育児不安と子育て支援ニーズについて調査研究を行ってきた。そのさい、子育て困難要因（リスクファクター）として、子どもの特性（心身の発達についての心配、「難しい子ども」気質）、親の子育てを支える人間関係、就労状況・就労意欲に焦点をあてて調査を行ってきた。

2001年に行った調査（調査方法については後述する）では、生理的リズムが不規則で機嫌の悪いことの多い「難しい子ども」の親、及び子どもの心身の発達について遅れの心配をしている親、相談・交流できる人が身近におらず孤立している親、すぐにでも働きたいのに働けないでいる親は、育児不安が高く、育児満足感が低い傾向がみられた。また、いずれも支援ニーズが全般的に高く、どちらかという相談先や交流の場よりも「育児を休みたいときの預け先」や「子育てから離れてリフレッシュ」が強く要望されていた。そこで、リスクファクターを抱え子育て困難な親への一時保育や一对一のケアを中心とした子育て支援の必要性を提起した⁽¹⁾。

2002年に行った追跡調査では、育児不安尺度に関する質問項目を追加し、子どもの発達や気質に関する項目を年齢に合わせて増やし、性別役割分業意識や母親役割意識や教育観を問う項目を新設し、さらにリスクファクターと育児不安・支援ニーズの関連を分析した⁽²⁾。

リスクファクターの中でも子どもの特徴の面からは、1歳から4歳の発達の

変化をみるために、2001年調査と2002年調査に共通する「育てにくさ」に関する17の質問項目によって「育児困難得点」を算出し、1歳から4歳の各年齢ごとの「育児困難高群」と育児不安、支援要求、マルトリートメントの関係を分析した。その結果、従来難しい気質として挙げられていた特徴のうち、新しい状況への慣れにくさや、敏感さ、生理的リズムの不規則さよりも、泣き叫んだり乱暴するなどという親のコントロールがききにくく、親の手をわずらわせるような項目で、育児不安が高くなっていることが見いだされた。また、1歳から4歳までを比較すると、年齢が高くなるについて、全体として育児困難が減少していくのに対して、「育児困難高群」は、他の親と比べて育児不安がはるかに高く、さらに年齢が高い方が一般群との差が増大していく傾向がみられた。さらに、マルトリートメント（「とめどなく叩いたり叱ったりすることがある」）の発生頻度も育児困難高群に高い傾向が見られた。支援要求についても、「育児困難高群」のニーズが一般群に比べて高く、さらに年齢が高くなるにつれて一般群との差が広がっている。年齢的な特徴に応じた「難しさ」の変化に着目し、それに応じた支援を行う必要性を確認した^③。

「気質的に子育てが難しい子ども」や、ADHDや高機能広汎性発達障害などの軽度発達障害の子どもの問題が注目されるようになってきている今日、そのような子どもたちやその家族を幼児期から支援していく必要性が議論されている^④。また、虐待やマルトリートメント（子どもへの不適切な対応）に関してもこのような「育てにくい子ども」との関連が示唆されている。そのような観点から、上に述べたような「子どもの育てにくさ」の視点からの分析は意義がある。根来あゆみらも、4歳から6歳の軽度発達障害児の主観的育てにくさに関与している子ども側の要因及び母親側の要因に関する研究を行っている^⑤。このようなことを考慮し、さらなる追跡調査として、4歳から6歳に対応した子どもの発達を問う質問項目や軽度発達障害の兆候といわれているような項目を追加して、2004年に調査を実施した^⑥。

本論文では、主に4歳児と6歳児をもつ親の育児困難の内容を、子どもの行動特徴や発達の課題に焦点をあてて育児不安、マルトリートメント、支援ニーズとの関連について年齢比較しながら分析したい。そして、多数ある子どもの

特徴を構造的にとらえ、とくにどのような側面が育児不安やマルトリートメントと関連するのかを明らかにしたい。

II. 方法

2004年に実施した質問紙調査の4歳と6歳の親のデータの分析を中心に、部分的に、これまでに行った調査の結果と比較しながら、検討する。各調査の方法は、以下のとおりである。

<2001年調査>

愛知県内12カ所の保健センターの健診（1歳半、3歳）受診者及びフォローアップグループ参加者の親2,519名を対象とした、育児困難・不安や支援ニーズに関する質問紙調査を行った（質問紙配布は保健センターに依頼、回収は回答者個別の郵送による）。

有効回答数 1,457 有効回答率 57.8%

調査時期 2001年2月

<2002年調査>

2001年調査の回答者のうち、継続調査に同意した人の中から1000人を抽出し、調査対象として、郵送による質問紙調査を実施した。主な対象の子どもの年齢は、2歳半と4歳である。

有効回答数 836 有効回答率 83.6%

調査時期 2002年3月

<2004年調査>

2001年調査の回答者のうち、継続調査協力に同意した人の中から1,115人を抽出し、調査対象者として、郵送による質問紙調査を行った。主な対象の子どもの年齢は、4歳半と6歳である。

有効回答数 907 有効回答率 81.3%

調査時期 2004年2月

Ⅲ. 調査結果と考察

1. 2004年調査の回答者の概要

回答者のほとんどは母親であったので、父親による回答データを除外した。また、対象となる子どもの年齢が2歳以下のものと、7歳以上のものについても除外した。回答者の年齢は、81.8%が30代、8.7%が40代、8.0%が20代であった。質問の対象となった子どもの年齢は、4歳半と6歳がほとんどで、月齢でいうと55ヶ月と73ヶ月がピークとなっている。4歳と6歳のそれぞれの平均月齢は、54.9ヶ月と73.6ヶ月である。4歳6ヶ月未満の子どもは、25人（4歳の6.3%）いた。大半の子どもは、幼稚園か保育園に就園している（図1、表1、表2参照）。

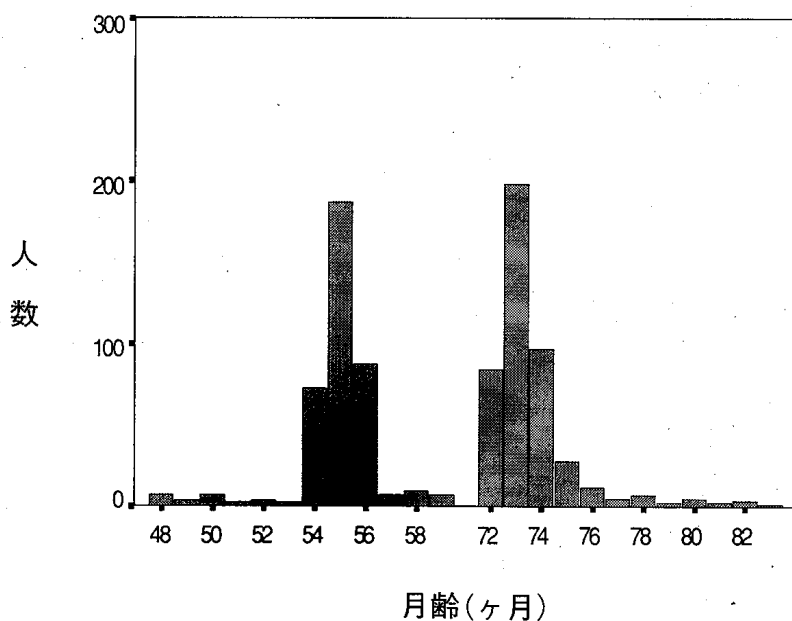


図1 4歳と6歳の月齢

表1 2004年調査の対象となる子ども

	人数	平均月齢 (標準偏差)
4歳	395	54.9 (1.57)
6歳	442	73.6 (1.71)

表2 男女別人数、就園状況 (%)

	4 歳	6 歳
男	210 (53.2)	216 (48.9)
女	185 (46.8)	226 (51.1)
幼稚園	163 (41.3)	238 (53.8)
保育園	181 (45.8)	202 (45.7)
未就園	50 (12.7)	1 (0.2)
無回答	1 (0.3)	1 (0.2)
合計	395 (100.0)	442 (100.0)

また、保健センターや専門機関などから発達上での問題や遅れなどを指摘されたことがある人は、4歳で36人(9.2%)、6歳で50人(11.4%)いた。

以下、4歳と6歳の子どもをもつ回答者のデータを抽出して、分析していく。

2. 子どもの特徴

(1) 子どもの特徴に関する得点

質問紙では、育児困難のリスクファクターとなりうるような子どもの特徴に関する質問項目が48あった。これらの各項目の回答(親の主観による)を点数化(1項目1~4点)し合計し、その総得点が特に高い群(平均値+1標準偏差以上)を、育児困難につながる可能性が高い「困難高群」とした。それ以外の群を、「一般群」とした。子どもの特徴に関する総得点は、表3のとおり、4歳で平均83.95点、6歳で76.50点で、4歳の方が全体的に困難度が高い。表4のように、「困難高群」は、4歳全体、6歳全体の15.7%を占めている。

表3 子どもの特徴に関する総得点

	N	平均値	標準偏差	t 検定
4 歳	351	83.95	15.301	***
6 歳	401	76.50	12.686	

*** p<.001

表4 困難高群の人数

（%）

	困難高群	一般群	合計
4歳	55 (15.7)	296 (84.3)	351 (100.0)
6歳	63 (15.7)	338 (84.3)	401 (100.0)

※全回答者がすべての項目を完全に回答しているわけではないので、それぞれの分析の視点ごとに、回答者の年齢別合計人数は異なる。

（2）子どもの特徴の下位尺度

子どもの特徴については、質問項目をその内容から、子どもの行動特徴（30項目）、発達（11項目）、身体発育（4項目）、身辺自立（3項目）の4つに分類した。子どもの行動特徴については、項目数が多いので、その回答（4歳と6歳を合わせた全体）について因子分析を行った。その結果表5のような4因子構造が窺われた。「いずれかの因子にたいして因子負荷量0.35以上」という基準にしたがって項目を選別したところ、25項目となった。4因子についてはそれぞれ「反応の激しさ」「内気さ」「落ち着きなさ」「（生理的リズムの）不規則」と名づけた。この25項目の全対象者のデータについて、選択肢の分布を検討したところ、「まったくあてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」とする率が非常に高くなったもの（いわゆる「フロア効果」）は、項目番号20, 23, 26, 30の4項目であった。本研究ではこのような結果になることが予想されていた項目もスクリーニング的な関心から、あえて質問項目としている。

結果的に、「反応の激しさ」「落ち着きなさ」には、ADHDの幼児期にみられる特徴が、「内気さ」には、高機能広汎性発達障害の特徴が、「不規則」には、その両者のもつ特徴がかなり含まれている。

表5 行動特徴の因子分析結果

項目	F1 反応の 激しさ	F2 内気さ	F3 落ち着き なさ	F4 リズム 不規則
13 かんしゃくを起こしやすい	0.92	-0.01	-0.08	-0.04
4 激しく泣き叫ぶ	0.80	-0.08	-0.01	-0.09
14 ちょっとしたこと泣く	0.76	0.05	-0.10	0.00
7 金切り声	0.67	0.03	-0.01	-0.01
12 ぐずるとなだめにくい	0.66	0.01	-0.06	0.06
15 わがまま	0.59	-0.01	0.13	0.01
6 手のかかる子	0.43	0.14	0.19	0.05
19 叱ると反抗	0.39	0.00	0.27	-0.02
27 他児が近寄ると嫌がる	-0.01	0.80	-0.09	-0.09
23 友達と遊べない	-0.12	0.78	0.12	-0.04
24 いつも母にくっついている	0.07	0.59	-0.09	0.04
26 いつも一人遊び	-0.07	0.57	0.15	0.02
21 はじめての場所等すぐ慣れる	-0.10	-0.57	0.36	-0.08
20 つきっきり援助が必要	0.10	0.40	0.14	0.08
17 いたずら	0.12	-0.03	0.59	-0.04
9 落ち着きなく動く	0.00	0.02	0.50	0.09
28 初対面の人に平気	-0.14	-0.20	0.50	-0.07
16 乱暴	0.35	-0.11	0.50	0.04
30 他児の物取ったり泣かせたり	-0.02	0.17	0.47	0.07
18 あきっぽい	0.01	0.15	0.45	0.02
10 親の言うこときかず	0.31	0.00	0.43	0.05
3 同時刻眠く	0.10	0.09	0.01	-0.73
1 寝るとき機嫌良	-0.08	0.08	0.11	-0.60
2 歯磨きいやがらず	0.09	-0.07	-0.13	-0.44
11 空腹まちまち	0.06	0.04	0.08	0.37

因子抽出法: 主因子法、回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

(3) 子どもの特徴の年齢比較

まず、子どもの特徴を4歳と6歳で比較してみたい。

子どもの特徴に関する下位尺度の項目群ごとに合計得点を年齢比較してみたのが、表6である。下位尺度ごとの項目群の得点の合計をもって、各下位尺度得点とした。得点が高いほど、子どもの難しさ・育てにくさを表している。「身体発育」以外の、「行動特徴」、「発達」、「身辺自立」において、4歳と6歳の差がみられ、いずれも4歳の方に難しさがみられた。「行動特徴」をさらに下位尺度ごとにみても、「反応の激しさ」、「内気さ」で差が見られた。

表6 子どもの特徴下位尺度得点の平均値

子どもの特徴下位尺度		平均値		t 検定
		4 歳	6 歳	
行動特徴総点		55.26	52.35	***
行動特徴	反応の激しさ	17.32	16.18	**
	内気さ	9.67	8.81	***
	落ち着きなさ	13.30	12.87	
	不規則	7.05	6.86	
発達点		17.5	13.74	***
身体発育点		6.78	6.69	
身辺自立点		4.58	3.74	***

** p<.01 , *** p<.001

一つ一つの質問項目ごとに、4歳と6歳でその得点の平均値を比較してみたのが、表7、表8である。「行動特徴」については、「反応の激しさ」と「内気さ」に差がみられたように、その群のほとんどの項目で差がみられる。「叱ると反抗する」は、6歳になると、言葉の獲得がいちだんと進み、自律心も育ってくるに関係しているのか、6歳でも点数が下がっておらず年齢による差があまりみられない。その他、「落ち着きなさ」の群においても「すぐ相手のものを取ったり泣かせたりする」「いたずら」「乱暴」で、「不規則」の群においても「寝るとき機嫌がよい」の項目で差が見られた。反応の激しさや、乱暴さ、人間関における内気さに関しては、6歳の方が難しい子が減っている。

「発達」の項目について見てみると、「体の動きがぎこちない」「発音が不明瞭・どもり」以外のすべての項目で差がみられた。（この2つの項目は、発達性協調障害の特徴であるともいわれている。）発達の1～9の項目には、ケンケン、スキップなど4歳半ごろに獲得されるものが多く、4歳の対象児にとっては獲得途上のものであったといえる。しかし、6歳になっても獲得されていないと思われる（3点以上）子どもが数パーセントずつおり、発達上の課題を抱えている子どもだと考えられる。

「身体発育」では「アレルギーがある」以外で、「身辺自立」では「夜尿が多

い」の項目以外で差がみられた。排泄時に自分で始末できるということも、4歳の課題であることから、6歳との差は納得できる。

表7 行動特徴の年齢比較

行動特徴		平均値		t 検定	4点 (%)		
		4歳	6歳		4歳	6歳	
反応の 激しさ	1	かんしゃくを起こしやすい	2.04	1.86	***	8.2	4.8
	2	思い通りにいかないと激しく泣き叫ぶ	2.61	2.36	***	15.6	13.1
	3	ちょっとしたことで激しく泣く	1.99	1.76	***	6.6	3.2
	4	遊びがうまくいかないと泣いたり金切り声	2.16	1.92	***	7.4	5.0
	5	ぐずるとなだめにくい	2.06	1.90	**	5.9	3.7
	6	わがまま	2.38	2.25	*	8.7	6.4
	7	手のかかる子だと思う	2.06	2.03		7.2	5.9
	8	叱ると反抗	2.14	2.14		3.4	3.9
内気さ	1	他の子どもが近寄ると、嫌がる	1.40	1.22	***	1.3	0
	2	友達と遊べない	1.38	1.26	***	1.5	0.7
	3	いつも母のそばにくっついている	1.68	1.53	***	2.1	0.9
	4	いつも一人で遊んでいる	1.62	1.48	***	1.3	0.5
	5	初めてのものや場所にもすぐ慣れる	2.08	1.83		5.9	39.8
	6	何をするにも、つきっきりの援助が必要	1.53	1.52		1.0	0.5
落ち着きなさ	1	いたずらをする	1.92	1.79	*	2.8	2.3
	2	落ち着きなく体を動かす	1.85	1.87		5.6	3.9
	3	初対面の人に対して平気で話しかける	2.15	2.07		12.8	10.0
	4	乱暴だ	1.77	1.65	*	3.1	2.3
	5	すぐモノを取ったり泣かせたりする	1.41	1.18	***	1.0	2.0
	6	あきっぽい	2.06	2.08		3.1	4.1
	7	親の言うことをなかなかきかない	2.17	2.22		3.3	3.0
不規則	1	毎晩だいたい決まった刻に眠くなる	1.68	1.66		1.8	1.8
	2	昼寝や夜寝かしつけられるとき機嫌よい	1.65	1.52	*	1.3	1.6
	3	嫌がらずに歯磨きする	1.69	1.71		2.6	1.8
	4	空腹時刻が日によってまちまち	2.04	1.98		3.8	1.8
その他	1	10分以上続けて遊ぶ	1.47	1.34	**	0.5	1.1
	2	好き嫌いしないで食べる	2.39	2.40		16.0	12.1
	3	夜泣きや、夜何度も起きる	1.30	1.20	**	1.3	0.7
	4	ひどい爪かみ、指しゃぶり、性器いじり	1.72	1.62		9.2	7.7
	5	お気に入りの物にさわっていないと不安	1.24	1.17		1.3	0.7

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

表8 発達・身体発育・身辺自立の年齢比較

子どもの特徴		平均値		t検定	3点以上 (%)		
		4歳	6歳		4歳	6歳	
発達	1	友達とごっこ遊びができる	1.40	1.23	***	6.2	2.3
	2	しりとりをして遊べる	1.96	1.15	***	30.1	1.6
	3	片足をあげてケンケンができる	1.28	1.09	***	3.8	0.2
	4	服の裏表・前後や靴の左右を間違えない	1.56	1.27	***	8.0	4.1
	5	はさみで簡単な形を切り抜くことができる	1.36	1.13	***	3.6	0.5
	6	スキップができる	1.93	1.23	***	29.8	5.0
	7	遊びのルールを理解し、守ることができる	1.81	1.36	***	14.2	4.6
	8	つま先立ちや片足立ちができる	1.39	1.13	***	4.9	0.7
	9	順番が待てる	1.59	1.23	***	5.6	1.8
	10	歩いたり走ったりの体の動きがぎこちない	1.18	1.14		2.0	1.1
	11	発音が不明瞭だったり、どもることがある	1.40	1.31		9.5	6.4
身体発育	1	身体の増加が遅い	1.56	1.76	***	14.3	25.9
	2	アレルギーがある	1.88	1.98		28.3	35.4
	3	よく病気をする	1.94	1.69	***	22.8	14.0
	4	太りすぎ	1.39	1.25	***	7.5	5.0
身辺自立	1	夜尿が多い	1.59	1.50		2.3	0.2
	2	昼間自分からトイレで小便できる	1.14	1.04	***	25.2	3.6
	3	大便のときも一人で始末ができる	1.84	1.19	***	17.4	15.3

*** p<.001

3. 子どもの特徴と育児不安の年齢比較

(1) 育児不安の年齢比較

育児不安に関する質問項目に対する回答を得点化し（1項目1～4点）、29項目の合計得点を育児不安総点とした。点数が高いほど、不安が強いことを表す。4歳と6歳で育児不安総点の平均値を比較してみると、4歳63.67点、6歳65.84点で、6歳の方が全体的に不安が高い（ $t=2.627$, $p<.01$ ）。子どもの特徴の総得点の平均値は、4歳の方が高かったが、育児不安総点は6歳の方が高いというのは、小学校入学を目の前にして、親の不安は全体的に高まっているのだろうか。

育児不安の各項目の得点を比較してみると、6歳の方が不安得点が高い項目

は、「子どもを育てるのは楽しい」、「育児によって自分が成長していると感じられる」、「子どもを産んでよかったと思う」、「子どもを宝物のように感じる」、という育児の楽しさや、「自分は子どもをうまく育てていると思う」、「子どもを育てる自信がなくなることがある」、「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある」、「自分は子どものことをわかっていないのではないかと思う」自信に関するもの、「一日が充実して、ハツラツとしている」、「毎日生活していて心に張りがない」、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」という充実感のなさやイライラに関するものであった。子育ての孤立感、圧迫感、疲れ、自己実現に関する項目は、4歳と6歳で得点にあまり違いがなかった。

表9 育児不安得点の年齢比較

育児不安項目	平均値		t 検定
	4歳	6歳	
1. 子どもを育てるのは楽しい (R)	1.44	1.60	***
2. 子どもを産んでよかったと思う (R)	1.14	1.22	***
3. 子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う (R)	1.64	1.78	**
4. 子どもといると、ゆったりとした気分になる	2.16	2.24	***
5. 子どもを宝物のように感じる (R)	1.28	1.37	*
6. 子育てをするようになってから社会的に孤立していると思う	2.29	2.27	
7. 子育ては自分に合っていないので早く好きなことをしたい	2.14	2.24	
8. 疲れやストレスがたまってイライラする	2.95	2.98	
9. 毎日生活していて心に張りが感じられない	2.16	2.29	*
10. 何か心が満たされず空虚である	2.04	2.09	***
11. 子育てを離れて一人になりたい気持ちになるときがある	2.72	2.71	***
12. 自分のやりたいことができなくなってしまうとあせる	2.60	2.60	***
13. 自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感	2.08	2.10	
14. 身体の疲れがとれず、いつも疲れている感じがする	2.59	2.60	
15. 誰も自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う	2.00	2.04	
16. 育児や家事など何もしたくない気分になる	2.54	2.60	
17. 子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	2.36	2.46	*
18. 子どもをつい叩いてしまうことがある	2.33	2.38	*
19. 子どもを育てる自信がなくなることがある	2.18	2.30	*
20. 子どものことで、どうしたらよいか分からなくなることがある	2.33	2.46	**

21. 自分の子どもの育て方はこれでいいのかと思うことがある	2.72	2.81	
22. 自分は子どものことをわかっていないのではないかと思う	2.50	2.60	*
23. 自分は、育児に向いていると思う (R)	2.58	2.70	*
24. 自分は子どもをうまく育てていると思う (R)	2.55	2.69	***
25. 育児によって、自分が成長していると感じられる (R)	1.81	1.97	***
26. 子どもから離れて、外出するのは心配でしかたがない	2.62	2.51	**
27. 一日が充実して、ハツラツとしている (R)	2.24	2.36	*
28. 昨年と比べて、全般的に育児が楽になった (R)	1.53	1.61	**
29. 自分の子育てが周りの人にどう思われるか気になる	2.25	2.24	
不安総点	63.67	65.84	**

(R) は逆転項目 * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

(2) 子どもの特徴と育児不安との関係

それでは、とくにどのような子どもの行動が、育児不安に結びつくのであろうか。子どもの特徴と育児不安総点との相関関係をみてみよう。

行動、発達、身体発育、身辺自立の下位尺度の項目群ごと育児不安総点との相関関係を分析してみると、4歳6歳ともに「行動特徴」とのやや強い相関関係、「発達」との弱い相関関係が見られた。「身体発育」は、4歳で弱い相関関係が見られた。「行動特徴」の下位尺度では、4歳で「反応の激しさ」、「落ち着きなさ」にやや強い相関がみられた（表10）。

表10 子どもの特徴と不安総点との相関関係

子どもの特徴下位尺度		平均値	
		4歳	6歳
行動特徴総点		.543 ***	.433 ***
行動特徴	反応の激しさ	.453 ***	.322 ***
	内気さ	.294 ***	.348 ***
	落ち着きなさ	.442 ***	.274 ***
	不規則	.306 ***	.243 ***
発達点		.359 ***	.339 ***
身体発育点		.203 ***	(.195 ***)
身辺自立点		(.197 ***)	(.106 ***)

*** p<.001

さらに、子どもの行動特徴に関する各質問項目について、育児不安総点との相関関係を分析してみた(表10、表11)。「反応の激しさ」に関する項目では、4歳、6歳ともにほとんどについて相関がみられた(相関係数が0.2以上のもの)。なかでも、4歳の「かんしゃくを起こしやすい」に最も強い相関がみられた。「落ち着きなさ」では、4歳よりも6歳で相関がみられる項目が減っているが、4歳、6歳ともに「すぐ相手のモノを取ったり泣かせたりする」、「あきっぽい」、「親の言うことをなかなかきかない」などで相関がみられる。新しい状況への慣れやすさや敏感さ、生理的リズムの不規則さよりも、子どもが激しい行動をとり、手がかかる場合や他の子どもとうまく遊べない場合、不安が強くなる傾向がある。この傾向は、2002年調査の2歳、4歳の場合とほぼ同じである。

「内気さ」に関する項目では、2002年調査ではなかった項目もあるが、「友達と遊べない」は2歳、4歳で相関がみられなかったのに、2004年調査の4歳、6歳では相関がみられるようになってきている。子どもが小さいときは一人で遊んでいたりと友達とうまく遊べなかったりしても、気にならなかったのが、年齢が上がってそのような姿が不安になってきたのではないだろうか。

「発達」に関する項目では、4歳、6歳ともに、「遊びのルールを理解し、守ることができる」、「順番が待てる」という、人間関係上の問題で相関が見られた。友達とのトラブルになりやすい事柄も、親のイライラや不安を高めると考えられる。4歳のみで相関がみられたものは、「友達とごっこ遊びができる」「しりとりをして遊べる」「片足をあげてケンケンができる」「服の裏表・前後や靴の左右をまちがえずに身に付けられる」「はさみで簡単な形を切り抜くことができる」という、認識や運動の発達の項目である。4歳児ではそれらができるようになる移行期であるため、獲得時期が遅いと、親が不安になるのだろうか。

表11 子どもの特徴と育児不安（総点）との相関関係

子どもの行動特徴		<2004年調査>		<2002年調査>		
		育児不安総点との相関		育児不安総点との相関		
		4歳	6歳	2歳	4歳	
反応の激しさ	1	かんしゃくを起こしやすい	.400 ***	.216 ***	.375 ***	.274 ***
	2	思い通りにいかないと激しく泣き叫ぶ	.286 ***		.220 ***	.263 ***
	3	ちょっとしたことで激しく泣く	.352 ***	.266 ***	.283 ***	.235 ***
	4	遊びがうまくいかないと泣いたり金切り声	.339 ***	.227 ***	.220 ***	.290 ***
	5	ぐずるとなだめにくい	.329 ***	.211 ***	.361 ***	
	6	わがまま	.320 ***	.241 ***	.288 ***	.308 ***
	7	手のかかる子だと思う	.306 ***	.311 ***	.355 ***	-.288 ***
	8	叱ると反抗	.233 ***	.261 ***		.229 ***
内気さ	1	他の子どもが近寄ると、嫌がる	.221 ***	.259 ***	-	-
	2	友達と遊べない	.276 ***	.265 ***		
	3	いつも母のそばにくっついている				
	4	いつも一人で遊んでいる	.232 ***	.324 ***	-	-
	5	初めてのものや場所にもすぐ慣れる			-	-
	6	何をするにも、つきっきりの援助が必要	.281 ***	.221 ***	.201 ***	
落ち着きなき	1	いたづらをする	.293 ***		.255 ***	
	2	落ち着きなく体を動かす	.257 ***			.235 ***
	3	初対面の人に対して平気で話しかける			-	-
	4	乱暴だ	.359 ***		.278 ***	
	5	すぐモノを取ったり泣かせたりする	.303 ***	.248 ***	.229 ***	
	6	あきっぽい	.370 ***	.216 ***	.242 ***	.221 ***
	7	親の言うことをなかなかきかない	.380 ***	.336 ***	.240 ***	.294 ***
不規則	1	毎晩だいたい決まった刻に眠くなる	-.260 ***			
	2	昼寝や夜寝かしつけられるとき機嫌よい			-.276 ***	
	3	嫌がらずに歯磨きする				
	4	空腹時刻が日によってまちまち	.240 ***			.209 ***
その他	1	10分以上続けて遊ぶ			-.233 ***	
	2	好き嫌いしないで食べる				
	3	夜泣きや、夜何度も起きる				
	4	ひどい爪かみ、指しゃぶり、性器いじり				
	5	お気に入りの物に触っていないと不安				

(ピアソンの相関係数.2以上のもの) *** p<.001

表12 育児不安 (総点) との相関関係 (発達・発育・身辺自立)

子どもの特徴		平均値	
		4歳	6歳
発達	1 友達とごっこ遊びができる	-.278***	
	2 しりとりをして遊べる	-.230***	
	3 片足をあげてケンケンができる	-.210***	
	4 服の裏表・前後や靴の左右を間違えない		
	5 はさみで簡単な形を切り抜くことができる	-.215***	
	6 スキップができる		
	7 遊びのルールを理解し、守ることができる	-.301***	-.251***
	8 つま先立ちや片足立ちができる		-.224***
	9 順番が待てる	-.284***	-.241***
	10 歩いたり走ったりの体の動きがぎこちない		
	11 発音が不明瞭だったり、どもることがある		
身体発育	1 身体の増加が遅い		
	2 アレルギーがある		
	3 よく病気をする		.282***
	4 太りすぎ		
身辺自立	1 夜尿が多い		
	2 昼間自分からトイレで小便できる		
	3 大便のときも一人で始末ができる		

(ピアソンの相関係数.2以上のもの) *** p<.001

4. 子どもの特徴とマルトリートメント

(1) マルトリートメントの年齢比較

「子どもをつい叩いてしまうことがある」(育児不安項目のうちのひとつ)と、「あなたは、お子さんを、とめどなく叱ったり、叩いたりすることがありますか」という質問項目についての回答をもとに、マルトリートメントの状況について年齢別に見てみよう(図2, 図3)。

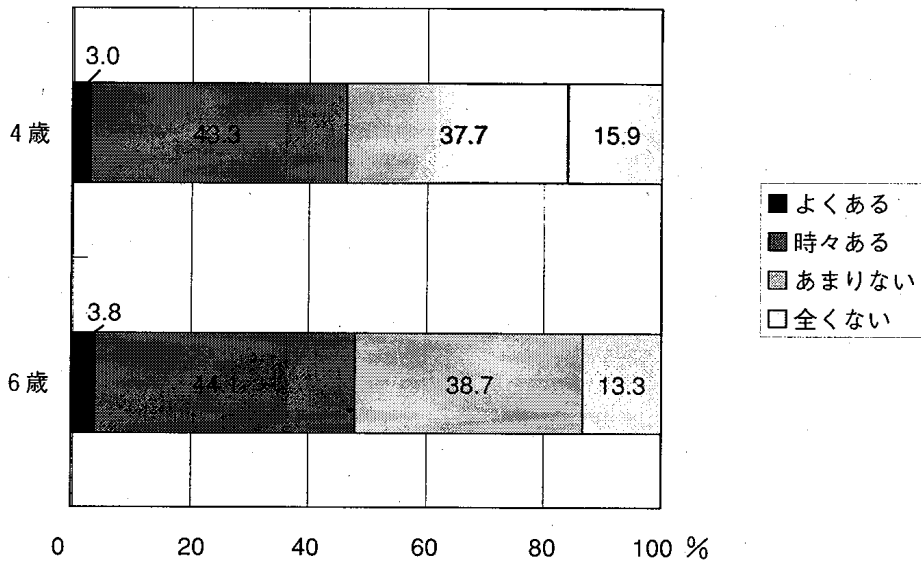


図2 「つい叩くことがある」

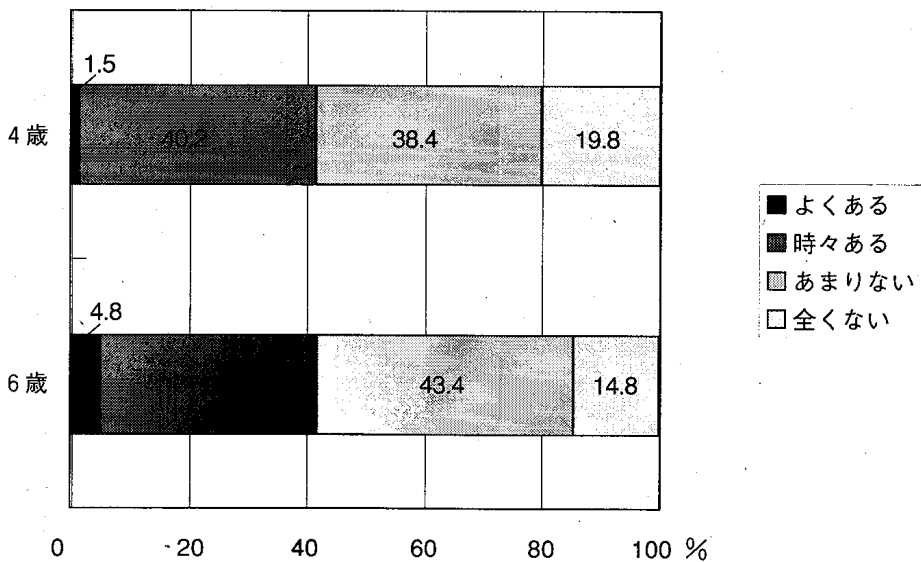


図3 「とめどなく叩く」

どちらの質問に対しても、また4歳も6歳も、半分近くの人が「よくある」または「ときどきある」と答えている。2002年調査の2歳、4歳もこれとほぼ同じ結果であった。二つの質問はややニュアンスの違いがあるようで、どちらの質問に対しても同じ答えをしている人は500人（60.3%）であり、他の人は一方には「よくある」が他方には「ときどきある」といった異なった選択肢を選んでいる。また年齢別には、「つい叩くことがある」は4歳と6歳で有意差がないが、「とめどなく叩いたり叱ったり」は有意差があり（ χ^2 検定 $p < .01$ ）、6歳

のほうが「よくある」が多く、「全くない」が少ない傾向にある。

(2) 子どもの特徴とマルトリートメントとの関係

前記のように、4割の人が二つの質問に対する答え方が異なっているが、マルトリートメントのおよその程度をつかむために、二つの質問に対する回答を、選択肢に応じて合計得点化した(「叩く合計得点」)。双方に「よくある」と答えた場合は8点、双方に「まったくない」場合は2点となる。この「叩く合計得点」と子どもの特徴との相関を見たのが、表13である。

4歳、6歳ともに「行動特徴得点」、その中でも「反応の激しさ」と「落ち着きなさ」との間に弱い相関がみられる。また、「発達」との間にも、弱い相関がみられる。泣き叫ぶなど激しい反応をすることと、叩いてしまうこととは関連があるが、内気さや生理的リズムとの関連はあまり強くないといえる。行動特徴に関しては、2002年調査でも2歳、4歳ともに「かんしゃくを起こしやすい」、「ちょっとしたことで激しく泣く」、「乱暴」との間に、また2歳で「わがまま」、「いたずら」、4歳で「思い通りにならないと泣き叫ぶ」との間に相関がみられたが、同じような傾向がみられる。

表13 子どもの特徴と「叩く合計得点」との相関関係

		4歳		6歳	
行動特徴総点		.366	***	.355	***
行動特徴	反応の激しさ	.367	***	.273	***
	内気さ	.105	*	.175	***
	落ち着きなさ	.379	***	.321	***
	不規則	.201	***	.193	***
発達点		.244	***	.246	***
身体発育点		.183	***	.111	*
身辺自立点		.063		.126	***

(ピアソンの相関係数) * p<.05, *** p<.001

5. 子どもの特徴と支援ニーズ

（1）子育て支援ニーズの年齢比較

親の支援ニーズをまず、年齢別にみてみよう。各支援項目に対する回答分布は、年齢別には有意差はほとんどなかった。図4は、回答のうち「とても必要とする」と答えた人のパーセンテージをあらわしている。「安心して遊べる場」がどちらの年齢も群をぬいて多い。ついで「用事があるときの預け先」「子どもから離れてリフレッシュ」となっている。

2001年調査の1歳と3歳のときの支援ニーズと比べると、どのニーズも「とても必要」が10～20ポイントくらい下がっている（「遊び場」、「入学にあたっての相談相手」は今回追加）。子どもが幼稚園・保育園に通うようになって、相談先や預け先ができたことによるものと思われる。

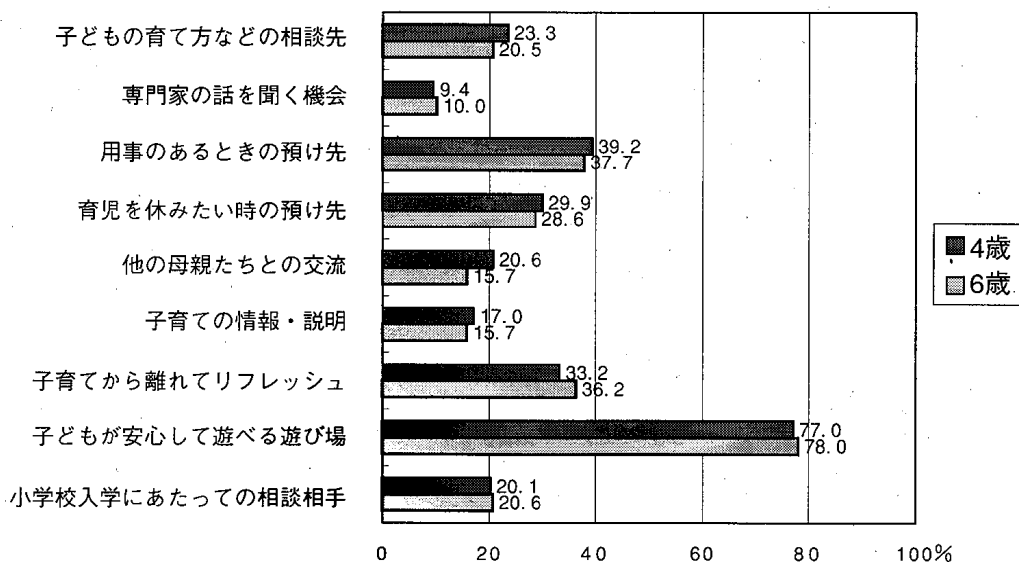


図4 子育て支援ニーズ（「とても必要とする」）

（2）園への要望の年齢比較

就園している子どもをもつ親に対して、園への要望を尋ねた。この点でも、年齢別の有意差はなかった。両年齢とも、「集団生活のルールを子どもに教えてほしい」がもっとも多く、ついで「家族が病気などの時の一時保育」であった。「子育て相談ができる場になってほしい」、「子どもの友達づきあいが上手になるような働きかけ」もその次に多く、子どもの人間関係に関する援助や、

園が気軽な相談の場となることが望まれている (図5参照)。

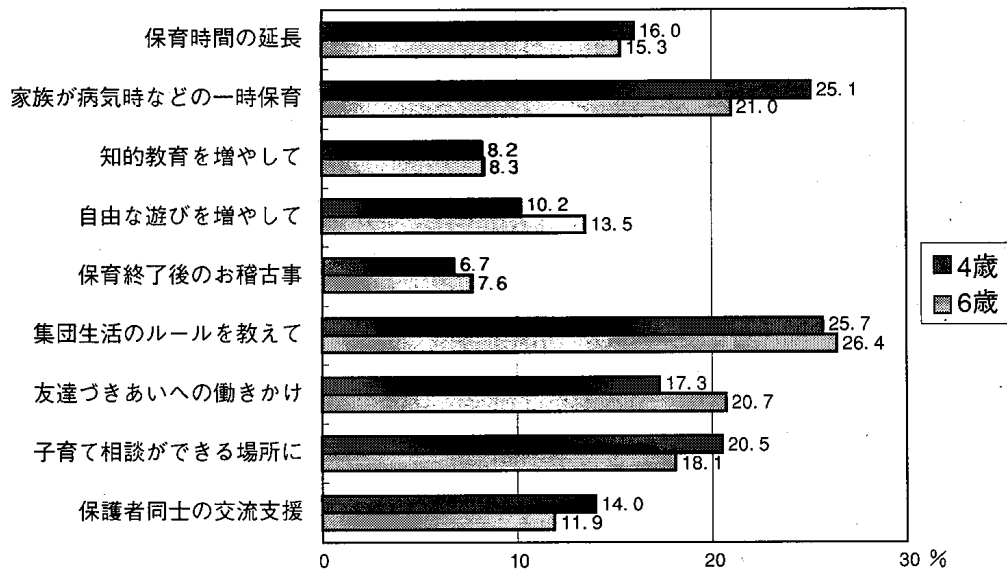


図5 園への要望 (「とても必要とする」)

(3) 子どもの特徴と支援ニーズ・園への要望

支援ニーズ9項目および園への要望について、子どもの特徴との相関を調べたが、下位尺度も含め、相関はみられなかった。子どもの特徴の違いによる要求の違いがみられないということなので、そこで、子どもの特徴に関する総得点の高い「困難高群」の支援ニーズをみることにする。

「困難高群」の支援ニーズは図6、図7のとおりである。「困難高群」と「一般群」との差は4歳ではあまりみられなかったが、6歳では「子育てから離れてリフレッシュ」で、「困難高群」の方が13ポイント高くなっている。1歳、3歳のときの「困難高群」の支援ニーズと比べると、どのニーズも「とても必要とする」人が少なくなっている。やはり、幼稚園・保育園やそこでできたつながりにより、ある程度満たされているのではないかと思われる。ただし、4歳で「育児を休みたいときの預け先」は、「とても必要」と「必要」を合わせると、「困難高群」の87.3%、「一般群」の69.9%で、「困難高群」の方が17ポイントほど高くなっており、「子育てから離れてリフレッシュ」も合わせると「困難高群」の87.3%、「一般群」の78.8%が必要としており、子どもに難しさがみられる場合、育児を休むための預け先を必要としている親がなお多いといえる。

「子育ての情報説明」も、「とても必要」と「必要」を合わせると、4歳で「困難高群」の74.6%、「一般群」の64.4%で、6歳で「困難高群」の79.4%、「一般群」の65.2%であり、「困難高群」の方が子育て情報や説明を求めている親が多い。

「困難高群」の幼稚園・保育園への要望は図8、図9のとおりである。「困難高群」では、4歳では「一時保育」、「子育て相談ができる場所になってほしい」、「友だちづきあいが上手になるような働きかけ」で、一般群より10ポイントほど多くなっている。6歳児では、「友だちづきあいが上手になる働きかけ」、「保育時間の延長」、「知的教育を増やしてほしい」、「お稽古ごとをやってほしい」で「困難高群」は「一般群」より少し多くなっている。しかし、「自由な遊びを増やしてほしい」で、「困難高群」は「一般群」より10ポイントほど低くなっている。このニーズに関しては、4歳に比べて、6歳では「一般群」のニーズが高まるのに反して、「困難高群」のニーズは低くなり、差が出ている。子どもに難しさがある場合、自由に遊ばせるよりもいろいろなことを教えてほしいと思うのではないだろうか。

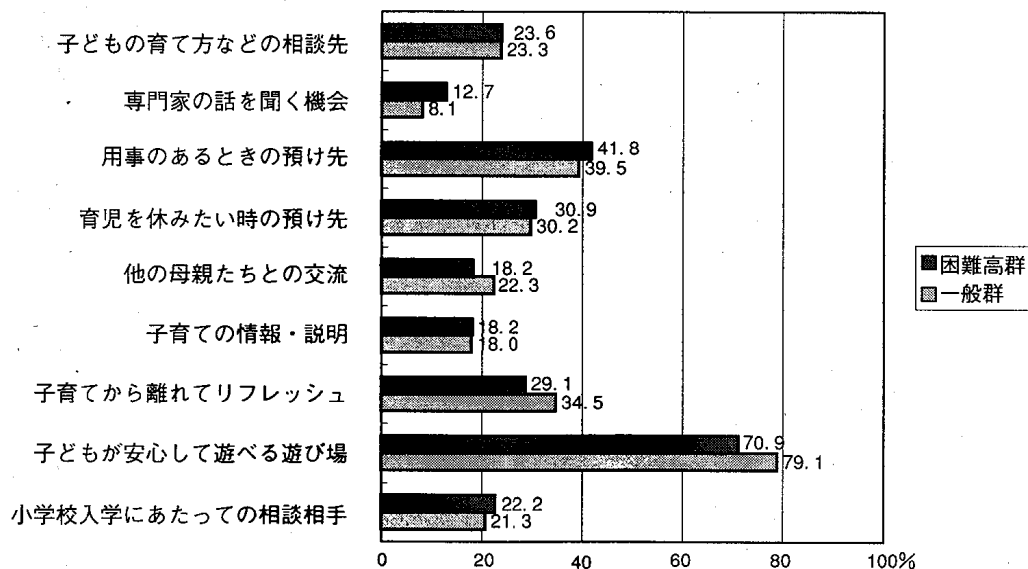


図6 困難高群の支援ニーズ 4歳（「とても必要とする」）

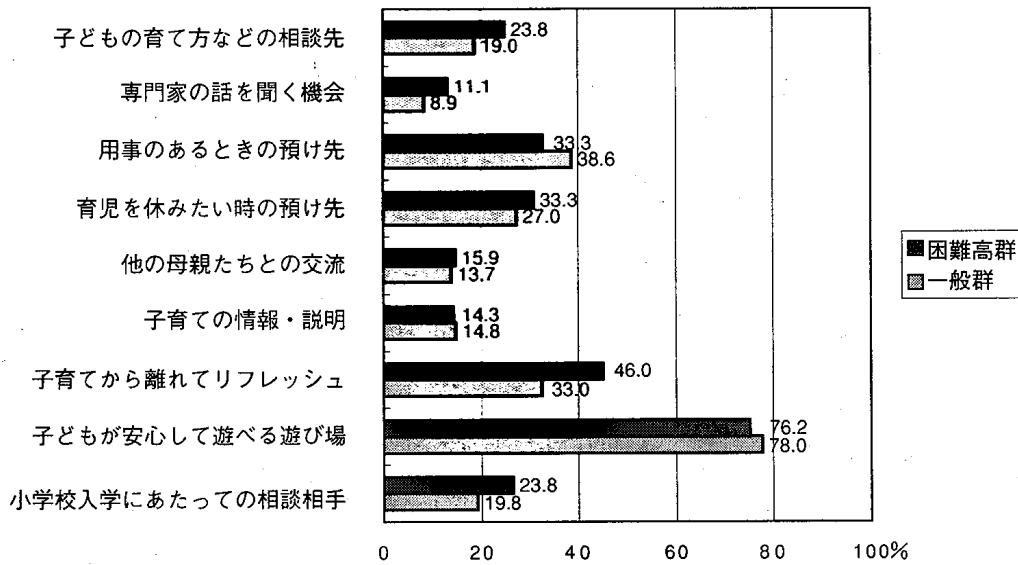


図7 困難高群の支援ニーズ 6歳 (「とても必要とする」)

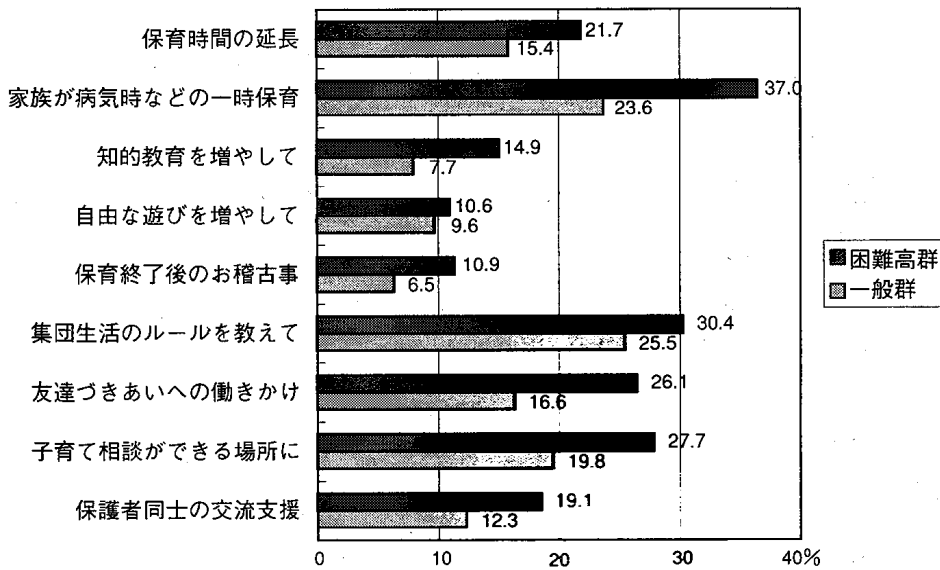


図8 困難高群の園への要望 4歳 (「とても必要とする」)

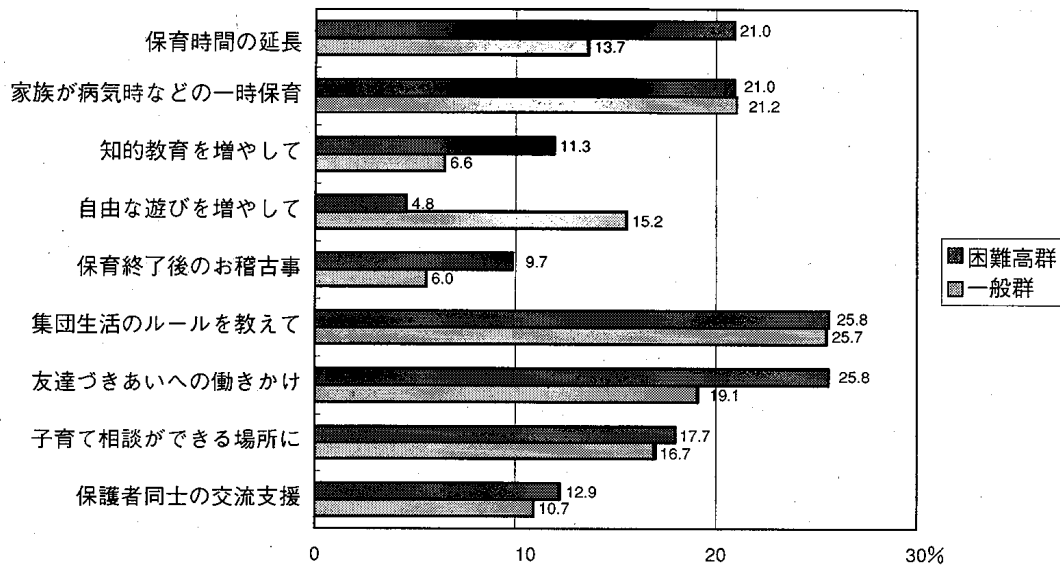


図9 困難高群の園への要望 6歳（「とても必要とする」）

IV. まとめ

子どもの特徴を行動特徴、発達、身体発育、身辺自立の4つに分類し、さらに行動特徴を4つの下位尺度に分け4歳と6歳の全体的な特徴をおさえ、それらと育児不安、マルトリートメント、支援要求との関係を分析した。反応の激しさや乱暴さ、人間関係における内気さに関しては、4歳より6歳の方が難しい子が減っている。また、発達や身辺自立についても、4歳を通して獲得される課題を含んだ項目については6歳でかなり獲得できていたが、まだ獲得されていないと思われる子どもも数パーセントずついた。不規則さや落ち着きのなさは、4歳ですでに難しい子が少なく6歳と差がなかった。

子どもの特徴と育児不安の関係については、これまでの調査と同様に、子どもが激しい行動をとり手がかかる場合や、他の子どもとうまく遊べない場合、不安が強くなる傾向がみられた。また、4歳でごっこ遊び、しりとり、片足ケンケン、はさみの使用など発達の課題を含んだ項目や、4歳6歳ともに「遊びのルールを理解し守ることができる」、「順番が待てる」などの人間関係上のトラブルにつながりやすいような項目との相関で、不安が高くなる傾向がみられた。

マルトリートメントとの関係でも、4歳、6歳ともに、子どもの行動の反応

の激しさ、落ち着きなさや、発達との間に弱い相関がみられた。親のコントロールがききにくい行動を子どもがとることが多いと、イライラや不安が高まり、叩いてしまうと思われる。

子どもの特徴の違いによる支援ニーズの違いは、見出されなかった。育児困難につながる可能性のある、全体的に子どもの特徴に難しさをもった親（「困難高群」）の支援要求は、子どもが幼稚園・保育園に通うことで、かなり満たされてはいるようだが、幼稚園・保育園への要望としては、4歳で友達関係における援助や子育て相談ができる場となることが、6歳でも友達関係における援助がより求められていた。就園前とは、支援ニーズが変わってきており、子どもが難しさをもつ場合、一時保育とともに、子どもの年齢や特徴を配慮して、保育者が子どもとかかわったり、親にかかわり方を具体的に助言することが求められているともいえる。

今回は、これまでに実施した調査による1歳からの発達的变化を十分検討することができなかつたので、今後の課題としたい。また、さらに、子どもの特徴・難しさと軽度発達障害の関係について分析を深め、支援の方法も検討していきたい。

*本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(c)、平成14～16年度、代表山本理絵）による研究である。

<注>

- (1) 神田直子・山本理絵「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方」『愛知県立大学児童教育学科論集』第35号 2001年
- (2) 山本理絵・神田直子「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方（Ⅱ）－『育児不安』と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に－」『愛知県立大学児童教育学科論集』第36号 2003年
- (3) 神田直子・山本理絵「子どもの『育てにくさ』と親の育児不安・マルトリートメント－1歳から4歳の発達的变化」『愛知県立大学児童教育学科論集』第37号 2004年
- (4) 別府悦子他「自主シンポジウム 気質的に『難しい』子どもおよび軽度発達障害

児の発達とソーシャルサポート」『日本教育心理学会第45回総会 発表論文集』S64-65 2003年、「特集 幼児期軽度発達障害児への支援」『発達』97号 2004年

- (5) 根来あゆみ他「軽度発達障害児の主観的育てにくさ感、母親への質問紙調査による検討」『発達』97号 2004年
- (6) 小枝達也編著『ADHD,LD,HFPDD,軽度MR児保健指導マニュアルーちょっと気になる子どもたちへの贈りもの』診断と治療社 2002年。杉山登志郎・辻井正次『高機能広汎性発達障害』ブレーン出版 2000年、石川道子「軽度発達障害児の発見と対応」『障害者問題研究』第30巻第2号 2002年